生物化学検査学演習Ⅰ（Graduate Seminar of Biological ChemistryⅠ）

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
高崎 昭彦、杉浦 論	１年次 前 期	選択	2	48	演習	あり	巻末掲載	可

授業概要 （内容と進め方） 及び 課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	生物化学検査学演習Ⅰでは、疾患早期発見に向けた種々の生物化学的検査を基に新たな検査手法の確立を目指し検討を行う。海外の原著論文なども輪読し、現状を把握し発展的な研究に結びつけるための基盤を学修する。 ＜高崎＞従来の血清生化学的検査法を見直し、共存物質の影響を把握し、感度と特異性を挙げるための実験系を組み立てることを目標に学修する。 ＜杉浦＞呼吸器感染症の診断方法に関して、その開発に必要な基礎技術から実用化されている検査方法を理解した上で、より優れた検査方法の開発に必要な考え方や手法について学修する。 課題に対するフィードバック方法／レポートに対して討論するほかコメントをつけて返却する。 実務家教員（高崎、杉浦）が講義を進めていく。
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー②「専門職業人として医療に対する幅広い知識と技能を駆使し、高度な臨床検査を実践できる。」及び③「健康に対する社会的ニーズを認識するとともに、グローバルな視野を持ち、科学的根拠に基づき、自ら考え、判断し、課題解決に向けて対応することができる。」の達成に寄与している。
到達目標 （履修者が到達すべき目標）	1.関連する海外の原著論文を読み、情勢を説明できる。 2.新たな検査手法確立に向けた実験系を組み立てることができる。
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	第1回～第24回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく／予め指定した論文を読み、その内容を概説できるようにしておくこと（各30分） 第1回～第24回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／教科書・配布資料で復習を行うこと。（各30分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位15回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位15回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。

授業計画	第 1 回	血中グルコース検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 2 回	血中グルコース検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 3 回	血中酵素活性検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 4 回	血中酵素活性検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 5 回	血中蛋白質検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 6 回	血中蛋白質検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 7 回	血中脂質検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 8 回	血中脂質検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 9 回	血中非蛋白性窒素・ホルモン量検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 10 回	血中非蛋白性窒素・ホルモン量検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 11 回	血中生体色素、微量金属検査法の問題点と発展性１	高崎昭彦
	第 12 回	血中生体色素、微量金属検査法の問題点と発展性２	高崎昭彦
	第 13 回	呼吸器疾患原因ウイルス・細菌の培養法１	杉浦　論
	第 14 回	呼吸器疾患原因ウイルス・細菌の培養法２	杉浦　論
	第 15 回	イムノクロマト法による抗原・抗体検査法の基礎１	杉浦　論
	第 16 回	イムノクロマト法による抗原・抗体検査法の基礎２	杉浦　論
	第 17 回	感染症の診断に用いられる抗体の開発１	杉浦　論
	第 18 回	感染症の診断に用いられる抗体の開発２	杉浦　論
	第 19 回	イムノクロマト法に用いられる様々な技術１	杉浦　論
	第 20 回	イムノクロマト法に用いられる様々な技術２	杉浦　論
	第 21 回	呼吸器感染症の遺伝子検査法１	杉浦　論
	第 22 回	呼吸器感染症の遺伝子検査法２	杉浦　論
	第 23 回	より優れた呼吸器感染症の診断方法の検討１	杉浦　論
	第 24 回	より優れた呼吸器感染症の診断方法の検討２	杉浦　論

評価方法 評価基準	レポートで評価する（100%）		
教科書	特に定めない	参考書等	担当教員が毎回資料を配布する
学生への メッセージ	生化学は検体検査の中心となっている。各領域における臨床検査の理論と方法について、英語文献から読解できるようよく学習してほしい。		